

体育系学生の体罰経験に関する研究

スポーツ社会学ゼミナール 1216007 雨貝杏香

1. 研究動機・研究目的

近年、体罰問題について取り上げられることが増えており、スポーツとは切っても切れない関係性にある。一方で被害者への対応は、改善されていっているようにもみえる。被害を受けた人が声を上げられるようになったこと、そしてそれを大きな問題として受け入れるようになったことは、大きな進歩であると言える。しかし、未だ水面下での問題が絶えないのも事実である。

この論文における体罰は、学校教育法第 11 条に記載されているものを指す。過去と現在での体罰問題の捉え方を知るとともに、何故近年になって変化してきたのか。長い年月によるものなのか、何か要因となる出来事が起こったのかを探る。また、大学生に調査をして、体罰の現状やその後の影響を調べる。体罰を受けたことがあるないに関わらず、子供でもなく大人とも言いがたい大学生という立場からの認識や考えを調査し、現状の大学生の体罰に関する経験や考えを明らかにした。

2. 研究方法

論文データベースの CiNii にて体罰を論じた論文を検索した。検索の結果、現在で 1345 件が発表されていることがわかった。なぜ体罰をふるってしまうのかを示している過去と現在の論文の共通点といえることは、体罰は問題であるという認識と体罰という安易な方法でなく教育方法を研究すべきであるということだ。大まかにいって、過去のは、体罰は法的に禁止されている行為であり、生徒にも悪影響を与えるので根絶するべきだが、その方法が困難である。といったものだ。それに対して現在は、教師は激務であり自身が体罰を受けていたがためにそれを正しいと考えてしまっているといった内容である。一方で、体罰を受けた児童・生徒についてはこれまで先行研究では、あまり指摘されていなかった。そこで、大学生 137 名を対象にアンケート調査を行った。

3. 結果と考察

体罰経験の有無について、あると回答したのが 38 人 (27.7%)、ないと回答したのが 99 人 (72.2%) であった。体罰を受けた時期は、高校生の時が 9 人、中学生が 20 人、それ以外が 8 人であった。種目は、バレーボールと野球が 9 人、陸上が 4 人、テニスとサッカーが 3 人、体操・ソフトボール・水泳・柔道が 2 人、ハンドボールとバドミントンが 1 人であった。体罰を受けた選手の競技水準は、国際大会出場レベルが 3 人、全国大会出場レベル 42 人、地方大会出場レベル (関東大会など複数の都道府県で行われる大会) が 41 人、都道府県大会出場レベルが 35 人、地域大会出場レベル (県内の地域ごとに行われる大会) が 16

人であった。体罰の種類として、「直接的な暴力」「言葉による暴力」が多かった。

学生は、体罰経験に対し3種類の反応がみられた。1つ目は、「怖い」や「苦痛」などといったネガティブなものである。2つ目は、「愛」や「信頼」といった風にポジティブなものである。体罰自体を悪いことではなく、それ自体を愛であるとし、その行為を行われることこそが信頼を得られている証と認識しているのである。3つ目は、「何も感じない」や「当たり前」などというものであった。また、体罰経験がある学生ほど体罰を容認する傾向がみられた。

「部活動」は、ある種の閉鎖された空間であり、顧問教師が絶対的な力を発揮できる場でもある。体罰を教師からの愛と信じ、良しとする「環境」と「勝てる」という現状から「強豪」と呼ばれる部活動に多いと考えられる。体罰経験のある人の体罰に対する捉え方は、人それぞれである。体罰の根本に愛があると信じたいというものなのではないだろうか。

4. 結論

「体罰」は、暴力なのか、愛なのか、教育なのか。本質誰にも分からないだろう。なぜなら。同じ事などあり得ないのだから。皆が「体罰問題」と一括りにするものは、中身が違うのだ。だからこそ、根絶することは難しい。人と人の中から生じる問題は、1つの方法で全て解決できるほど甘いものではないと思われ知らされる。体罰は、強大な力を持っている。教師とて人である。惑わされたら手を伸ばしてしまうだろう。体罰を擁護するわけではないが、そんな一面もあるのだ。だからこそ、一時の感情に流されないために指導力を身に付けてほしいと願う。これから教師になる人、既に教師である人全員に言いたい。どれだけ生徒のことを想った上での行動であってもそれを判断するのは生徒である。そこにどのような関係性が築かれていても、体罰によって幸せになることはないのだ。あるのは、体罰問題が法的に禁止されているという事実だけである。

5. 卒業論文の執筆を終えて

今回「体罰」について研究を行って、以前より難しくなったというのが本音である。人と人の関係性の難しさを改めて思い知らされた。体罰の根本にあるものを教育とするのなら「やり過ぎ」であり、体罰を盾にふんぞり返る生徒は「行き過ぎ」である。お互いの中間を取れば良い関係になれそうなのに、上手くいかないのが現実である。この話は、何も「体罰」のみではなく「パワハラ」「セクハラ」といった内容のものにもいえるのではないだろうか。そして、それを盾にふんぞり返る大人が「行き過ぎた」生徒であったことが一概に否定できないことをもどかしく感じる。話が逸れたが、私は現状を知らない。だから、現在教師として働いている方、中学生・高校生の生徒にアンケート調査やインタビュー調査を行い、現在の学校の実体と体罰についての意識調査を行うことで、もっと見えてくるものがあるのではないかと考える。